

新入生オリエンテーションキャンプを終えて

学生部

恒例の新入生オリエンテーションキャンプを、4月22日(土)、23日(日)の両日、宮島町の包ヶ浦キャンプ場において実施しました。

17回目となる今年のキャンプも参加者が増え、新入生1,829名、留学生1名、フェロー158名、運営役員214名、教職員211名の総勢2,413名の参加という壮大なものとなりました。

このキャンプを実施するに当たり、主催する大学及び主管の体育会によってフェロー講習会、フェロー合宿、運営役員及びフェローによるリハーサルキャンプ、顔合せ、テント設営会、パンフレットの作成、雨天等非常時の対策などの検討会等準備に半年をかけ、万全を期してまいりました。

また、出発前から心配されていた雨も、開村式、テント設営を終えて学部別行事を行っている午後3時頃より降りをはじめましたが、大きな雨にはならず予定されたプログラムのほとんどを消化し、避難ということもなく無事キャンプを終了することができました。



趣向を凝らしたコスチュームで宇品港に集合し、約40分の船旅、500m余りの仮装行列とも言える壮観な浜辺の行進、開村式、テ

ント設営、学部別行事とプログラムが進むにつれて皆さんの顔が生き生きとしてきたのを感じました。最大のイベントであるキャンプファイヤーは、あいにく小雨の中でしたが、皆で歌い、踊る姿は活気にあふれ、雨を感じさせない素晴らしいひとときでした。

自然の中で先生や先輩とテント設営、マキ割り、食事の準備に悪戦苦闘したこと、夜を徹して語らうことのできたキャンプという共同生活を通じ、広島大学の学生という自覚と、連帯感を深め、新たな師、新たな先輩、新たな友人を得ることができた有意義なキャンプであったと思います。

最後に、新入生諸君がこれから充実した学生生活をおくられるよう祈念し、このキャンプを実施するにあたり、ご協力いただいた関係各位に深く感謝いたします。

広大を愛する一学生より

第17回新入生オリエンテーションキャンプ

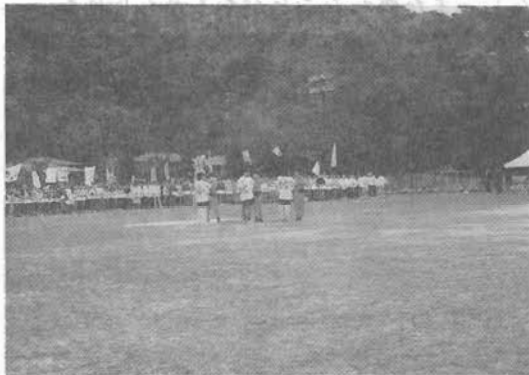
総局長

保阪 健市 (61. 学校教育学部)

4月23日午後3時、狂喜乱舞と化した1泊2日に終わりを告げるアナウンスが鳴り響き、包ヶ浦の栈橋から一隻一隻フェリーが離れ、そして最後のフェリーが見えなくなった時、私の胸の中にこみあげてきたものは、かすかな安堵感と今まで自分がこの広島大学で過ごした、三年間にわたる自分自身の大学生活についてだった。

今回のオリキャンで私が総局長として常にかかっていた言葉で、「オリキャンでオリキャンを語るのではなく、オリキャンで大学生活を語れ！」というのがある。これは、主に半年間にわたる長い準備期間のあいだ、運営役員やフェロー達に言っていた言葉であるが、半年間の長い準備期間をたった1泊2日の事だけを考えるのではなく、せっかく、すべての学部からいろんな個性を持った人間が集まるのだから、お互いにおつかり合うことでお互いをみがき、一人一人がより有意義な大学生活を送ってほしい、という願いと、このオリキャンが本当の意味での新入生にとっての大学生活のオリエンテーションになってほしい、という願いをこめたものである。

何年前からか我が広島大学は、活気のない大学とか特徴がないのが特徴とか、良いふうには例えられる事が少なくなっている、ということは学生諸君も教職員の方々も御存知のことと思う。確かに、学生同志の間には真の友情と呼べるものは少なく、それに気づいてか気づかないでか、お互いにただ時間を無駄にしている。そこにはまったく連帯感など存在しない。では個人個人についてどうかといえば、人生の中の数年間を何のために大学生として過ごそうとしているのかと、疑問さえ湧いてくるような何の目的意識も感じられない学生が目につく。



では一体、何に原因があるのだろうか。他の一般に“活気がある”といわれる大学の学生や、まだ広大が“活気がない”といわれる前の学生と、どんな違いがあるのだろうか。

ここ数年、入試制度が変わり、広大を第一希望として入って来る学生が減った。又、受験戦争の歪みで、少しでも偏差値の高い大学に入ることだけが目的になってしまい、大学に入ったとたん目的を失ってしまう学生が増えてきている。又、昔と違い、あらゆる物に恵まれ娯楽産業が発達し、ただボーッと過ごしていても楽しめる時代になった。確かに今広大をとりまく環境や時代は、昔の広大や他大学とは大きく違う。しかし、だからといって、今の広大生の人間としての質が劣っている、ということは絶対にはずだ。

今の時代、人前で、自分の内面にあるものをさらけだし、熱い思いをぶつけ、物事にこだわる事を恥ずかしいことだと思う風潮が強い。しかし、日々を無為に過ごしても何も変わらないし、決して良くなるはずがない。個人個人に内在するものをみがき高めるために、自分をさらけだし、他人におつかり、あらゆることにこだわられるのが今であり、そのことが真に広大を活気のある大学に導くのではないだろうか。だからこそ、前の方で述べたが、大学生活を語ることで大学生活に問題意識を持ち、この限られた4年間にこだわって過ごしてほしいと思う。

現在、統合移転によりオリキャンも、その存在が危うくなっている。今、オリキャンがなくなっても全然不思議ではない程の深刻な問題である。しかし、今の広大だからこそ絶対にオリキャンがなくなるとはいけないと思う。広大が誇れる唯一の全学行事であり、在校生と教職員が一体となって新入生を迎えることにより、広大生の内に秘めた熱いものを触発する無限の可能性のあるオリキャンを絶対なくしてはいけないと思う。そのことを学生諸君や教職員の方々に理解していただきたいと思う。

最後に、第17回オリキャンにかかわったすべての人に感謝の意を表します。

ありがとうございました。

第17回オリキャンを終えて

第17代統制管理局局長

渡部 俊子 (63.文学部)

今、第17回オリキャンを終えて、去年自分が新生として参加したオリキャンとは全然違うものだったと改めて思う。

入学したばかりの頃は雑用が多く、毎日が何かしら忙しく、気がついたらオリキャンも終わっていたような気がする。その中でわかったことは、友達が増えたことと、多くの人たちがオリキャンのために心を注いでいるということだった。右も左もわからなかったけれど、フェローや準備役員（あの頃は準役という単語も知らなかった）などがずいぶん前から準備してくれているということだけは感じる事ができた。それだから、今年、準役をして、またオリキャンに参加したいと思ったのだと思う。

今回、私が準備役員として、統制管理局に入ることになったのは、いろいろ手違いが重なったためだったらしい。偶然誕生してしまった統管史上初の女子局員らしく、私自身も、周りから思われていたよりもずっと気楽に仕事をしたと思う。深く考えずに統管に立候補し、時々休みながら続けていった。あまりにも私が平気な顔をしているので、あきれて見られることもあったし、自分でも不思議に思ったりした。

こんなふうによくと、何の苦労もなかったようだけど、そうでもなく、それなりにプレッシャーを感じたりもした。統管史上初の女子局員だから、一生懸命頑張って、りっぱな功績を残そうとか、そんなことは考えていなかったけれども、自分が“最初で最後の統管女子局員”にはなりたくなかった。“最初で”はいいけれども“最後の”もついてしまえば、

自分が情ないし、来年以降、統管になりたいと思う女子がいた場合、申し訳ないから、そうならないよう、自分なりに最善を尽くした。

とにかく、私が統管を最後まで続けることができたのは、オリキャンの準備自体を気負ったりせずに楽しんだことと、周りからの励ましがあったからだと思う。中でも一番心に残ったのは、「準役が裏方だなんて思わない。」という言葉だった。それまでは、準役が嫌だなんて思ったことはなかったけれども、準役は、新生がオリキャンを楽しむための裏方だとばかり思っていた。（今でも、その役目はあると思うけれど）でも、その時ああ、そうではないのだな、新生のためだけでなく、自分たちのためにもオリキャンをつくっていいのだなとわかって、やけにうれしかった。新生にオリキャンを楽しんでもらって、大学っていうのはこんなにいい所なんだよって示すのと同時に、大学っていうのはこんなに素敵な所なのだなと素直に思えるようになったのは、その時なのかもしれない。

他にもいろいろなことがあったけど、友達が増えたことは去年と同じく、一つの成果であるに違いない。今でも学内などで声をかけられたりすると、すごくうれしい。これからも、あの人たちと、もっと話ができたらと思う。フェローなどに対する自分の考え方も、今度のオリキャンの前と後では大きく変わったし、また変わることもあるかもしれない。



オリキャンに限らず、何か行事に参加するたび、いつも思うことは、他の人も自分と同じように、この行事を、人との出会いを楽し

んでいてくれるのであれば、ということである。例えば、去年のオリキャンでは、必ずしも全員が楽しかった訳ではないと知っているけれども、それでも、皆がこれからでもいいから楽しいと思えるようになれば、といつも思う。たとえ無理だとわかっているけれども、自分のうれしさをそうでない人に分けてあげたいと思う。

使い古された言葉かもしれないけれど、もう一度言いたい。第17回オリキャンは終わったけど、自分たちのオリキャンは今始まったばかり――。

自分にとってのオリキャン

フェロー

東山 浩一 (63.工学部)

オリキャンが終わって、少ししかたっていないのに、もうオリキャンがずっと前の事のように思い出されます。

振り返ってみると、4月14日のオリキャン顔合わせの日、教育の大講義室で新生が入ってくるのを待っている間、自分の班員の名簿を見て「こいつは、どんなやつだろう。ノリの悪いやつだったらどうしよう。」とか考え、ひどく緊張し、ほんの少しの時間がひどく長く感じられました。

そして、そのひどく緊張した顔合わせから本番までの一週間、この一週間は、自分が考えていたようにうまくいかないときもあり、いろいろ悩み事も多かったけど、日がたつにつれて、班のみんながいろんな話をして仲良くなっていっているのが分かり、1日1日が楽しくあっという間に過ぎてしまいました。そして、オリキャンの当日、本当に自分がやろうとしていたものは、やれるんだろうかという気持ち半分、ここまでやってきたんだから絶対やれるという気持ち半分で宇品港を出発しました。包ヶ浦に着くと、テント設営、昼食をすばやくすませてしまい学部別行事に

うつりました。ところが、音響が全くだめになってしまい、決して満足のいくものにはなりませんでした。その後の青空トーキングでは、新生から専門に関する質問が出たりしたけれど、大学に入ってからたった1年しかたっていないような私に答えられるものは少なく、ほとんど教官の方にたよりきってしまいました。打ち合わせも万全でなかったのに、教官の方には、本当に、お世話になりました。そして、夕食をとり、待ちに待っていたファイヤーでした。雨が、かなり降っていて、最悪の状況だったけれど、去年のファイヤーにも負けず劣らずの最高のものでした。自分自身、はじめて、オリキャンのパワーというものを確認した場でもあったような気がします。



そして、2日目の野活の時間は、最初いろんな遊びをし、最後にみんなで風船に寄せ書きをして飛ばしました。この風船上げは、本番前に、うまく風船が宙に上がるか何度も実験をやっていただけに思い入れが強く、みんなが寄せがきをした風船が上がった時には、涙が出るくらいうれしかったです。そして、GCC、テント回収がすみ、オリキャンは閉村式をもって幕を閉じました。「ああ、もう、これでオリキャンも終わってしまうんだなあ。」という思いにひたっていると、班員から「ちょっと来て。」という声。呼ばれて行ってみると「胴上げ、胴上げ。」という班員たちの声と同時に、ほくの体は、高く空に放り上げられました。その時、これ

までのつらかった事は、どこかへ消え、フェローやってよかったという思いでいっぱいになりました。

考えてみると、頼りないフェローで新入生にきちんと大学生活をオリエンテーションできたんだろうとか心残りの事もあります。でも、満足できるオリキャンだったと思っています。第17回のオリキャンは、4月23日に終わりました。でも、ほくの心の中では、いつまでも生きていくだろうと思います。最後に、こんなにすばらしいものを与えてくれたオリキャンに感謝したいと思います。

I took part in オリキャン

新入生

野口 美奈 (元. 教育学部)

「大学に入ったら楽しく過ごそう!」と思っていた私は、一も二もなくオリキャンに参加した。一人ルンルン気分顔合わせに出た私は他の班員、そして一緒に組むことになって秘かに喜んでいた工学部班員を見て、「大丈夫だろうか……。」と不安になった。ところがどっこい、集まって話をする回数を重ねるたびに皆、本性を現し始め、だんだんと仲良くいい雰囲気になっていった。そしてオリキャン当日。「日本は平和だなあ。」とシミジミと思える異様なコスチュームをまとった人の数と、芝生の上に転がる黒い粒とどっちが多いだろうとバカなことを考えつつ、テントの張り方をすっかり忘れていた私であった。お昼は前日にみんなで作ったおにぎりだったが、私達女子は形容し難い不気味な形に中味が梅干しのみという、明らかに工学部が作ったものと思われるものを食べた。自分たちのにぎった三角タラコおにぎりに出会うことはなかった……。そして学部別行事が始まる頃にパラパラと雨が降ってきた。それほどひどいものではなかったが、やはりファイヤーでカッパを着て「トレイン、トレ

イン”を踊りまくるのは風流かつ邪魔くさいものを感じられた。おかげでその後の星空トーキングもテント内でのおしゃべりから怪談へと転じ出し、「怖いからやめよう。」と意見が一致したとたんに、「己斐峠でさあ……。」と口走る、とても善良な班員達であった。普通、キャンプなんて、徹夜してしゃべりまくりそうだが、私達教育3班女子6名は毛布を敷くなり寝てしまうという、キャンプにおける模範生であった。



次の日も天気は思わしくなかったが、もう天気なんて私達には関係ない。朝食のスパゲティはゆで上がった瞬間鍋ごとひっくり返し、「カンけり」(正確には「ボトルけり」)や「だるまさんが転んだ」に興じ、みんなで真っ黄色のコスチュームに書きたい放題書きあい、上のテント場からハイヅカでかけおいて負傷者約一名を出し、懲りずに帰りの船上でも水しぶきを浴びつつハイヅカに燃えた。個人的に、「ハイヅカ」は日本全国に広めたいくらい好きである。オリキャン後の打ち上げでは、日本の治安を守って下さっている方々まで出動する程のパワーを持っていて、私は非常に好きである。

私は自分の班のフェローさん、班員、そして工学部班のみんなとオリキャンという形で出会えた偶然と、オリキャンの2日間を広大のみんなと過ごせたことをとてもラッキーだったと思うし、また自分が広大生であることを誇らしく思う。広大に来てオリキャンに参加していなければ、こんなに貴重な体験とすばらしい仲間を得ることは不可能であった

だろう。どこの班でもそうだろうが、私達の班もオリキャンが終わってから何度となく集まって、楽しく騒いでいる今日この頃である。

最後に、フェローさん、影でオリキャンを支えてくれた役員さん、先生方、本当にお疲れさまでした。このオリキャンという伝統をこれからもずっと続けていきたいと思ひます。ありがとうございました。わーい、わーい、オリキャン万歳！

オリキャン

それは大学生生活の活力剤

新入生

今井 浩幸 (元.理学部)

4月22日と23日に、雨のなか、宮島包ヶ浦で新入生オリエンテーションキャンプが行われ、私も新入生の一人として参加しました。

このオリエンテーションキャンプ（以下オリキャンという）で私は、友達ができ、また人生の転換になるような何かをつかんだと思ひます。

今、オリキャンをふり返ってみると、一週間という限られた準備期間の中で、班の仲間が集まりあって深夜までがんばり合い、時には朝帰りをする者もいれば、時には体調をくずしてまで集まる者もいて、私たちが他の班と一緒にいて行けるかどうか不安だという気持ちがある半面、これだけ一生懸命に準備をしたのだから、絶対に私たちのオリキャンを成功させるぞ、といった三つの入り混った気持ちでオリキャンに臨み、実際にオリキャンでは、班の仲間が足りない部分は補いあい、手のあいた人間は、忙しいところへ行って作業をし、当初思っていたよりも大変だったなあと思ひました。

オリキャンの日を迎えるまでの準備について述べたいと思ひますが、その内容というのは、テントの設営方法を学び、3回の食事の

献立と材料を決め、学部別行事とファイヤーの時に踊る振り付けを覚え、自分たちの班旗を作り、そして最も重要なのは、各班各班を象徴するコスチュームを考え出し作成することでした。

苦悩の末、あみ出されたコスチュームは私たちの班の場合、大きな黒い布に首を入れるため中央に穴をあけ、垂れ下がった布を自分の前後に垂らし、腰にひもを巻くといった単純なもので、実際に、他の班のものを見ると、見劣りはしますけれども、それでも自分の班が一番良いような気がします。



今度はオリキャン自身について述べたいと思ひますが、一番すばらしかった点は、二千人を超える大人数の中で、各人各人が一致し、また、だれもが感動しあえたところだと私は思ひます。

どの行事を見ても、班全員がバラバラに行動してしまえば成立しなくなるであろうものを、全員が一致し、各行事を円滑に行えたのはすばらしいことですし、やはりここで注目されるのは、この一致を終始見守り続けた各班のフェローの存在だと思ひます。

ここでは私たちの班のフェローだけに限って述べますが、そのフェローは、準備期間中でも、班全体が十分な準備ができるように綿密な計画を立ててくださり、また、そのために十分な栄養と環境を提供して下さり、更に、何も知らない私たちを指導して下さり、オリキャンでは、班員の意気を盛り上げるために、自らが奮い立って、その場を盛り上がらせ、私たちもその場を堪能できた

ことに、今感謝しています。閉村式が終了した後、私たちの班は、そのフェローを胴上げしましたけれども、その体が天高く舞い上がる時の感動を今でも覚えています。

結局これが、オリキャンの本義ではないでしょうか。

互いに助け合い、また互いに喜び合う、こういった行動が、大学へ入学するために行われていた受験勉強で失われ、大学生になってもまだ完全に回復していないであろうこの時に、オリキャンが行われることは、このこと

を完全に回復できることで、素晴らしいものであり、まだ偉大なるものだと思います。

まさにこのオリキャンは、友達づくりの苦手な私にとって友達をつくる最大の機会となり、また締まりのなくなるかもしれない生活をけじめのある有意義な生活にすることができ、更にこれからの大学生活において、今までの人生経験にないことを経験するかもしれない点で、生き生きしたものになったという点で、私はオリキャンのことを、「大学生活の活力剤」と呼ぶことにします。

サークル紹介

アメリカンフットボール雑感

経済学部学生 木下忠幸



アメリカンフットボール部は総員56名で、週4回学校教育学部東雲グラウンドで活動しています。週4日のしかも1日数時間の練習で、いかにチーム力を高めていくかが一番の課題になっています。学生時代にアメフトだけしかできないというのではつまらない、自由な時間を有効に活用し、学生生活を一層充実させようという、創部当時の先輩の精神を受け

継いで少ない練習日数になっているわけです。そこで綿密な練習計画と試合戦略が必然的に大事になってきます。分単位で練習と休憩を規定し、最大限に効率アップをはかります。またデスクワークが試合の勝敗の8割を占めるといわれるほどアメフトでは試合戦略が大切です。対戦校のビデオを撮り、傾向と弱点を把握し、ミーティングでそれを徹底させ、それを練習に反映させます。近年盛んにアメフト人気の高まりが叫ばれていますが、中四国地方では今一つのようです。見た目の煩雑さが親しみやすさをなくしてしまうのが一番の要因だと思います。しかし実際はいたって簡単な仕組みでできています。またわからなくても素晴らしい感動と興奮を与えてくれるのがアメフトです。私の拙い文章で一人でも多くの方がアメフトに関心を持たれ、実際に試合観戦に来られることを希望してペンを置きます。